

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



今年、大同の春は遅かった。カササギも暖くなるのを待ちわびているようだ

Contents

- 会員総会のご案内 P 2
- 新しいスタートにむけて P 2
- 遅かった春の訪れ～春のツアー報告 P 3
- 夏のワーキングツアーご案内 P 7

2010.5

133

認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク

緑の地球ネットワーク 第16回会員総会のご案内

GENが大同で緑化協力をはじめて18年、中国は大きく変わりました。環境や自然より経済成長を追い求め、疾走していた90年代。世紀の変わり目、環境破壊の深刻さに気づいてまず「退耕還林・還草」政策を打ち出しました。特に大同は、北京・天津の水源・風砂源として、国家級の緑化プロジェクトが次々と実施されるようになりました。

そんななかで細々と続いてきたGENの緑化プロジェクト。活動開始当初は、大同にはめずらしい国際協力ということもあって歓迎されましたが、いまでは国家級の巨大プロジェクトに埋没しがちです。新しい造林地の選定も、以前ほど簡単にはいなくなってきました。そこに、今回の環境林センター移転問題がおきました。

GENの活動にも、20周年を目前に、

大きな転機が訪れています。これまで積み重ねてきた経験、培ってきた技術を生かして、多様性のある森林再生を追求し、地域の発展につなげるような、そんな活動の形を模索する年になりそうです。新しい環境林センターも、じっくりと果たすべき役割を検討し、設計・建設していきます。

おりにふれ報告してきたこのような話を、直接聞いていただける機会です。会員のみなさんには別途会員総会案内の文書をお送りしますので、ぜひご参加ください。

また今回、記念講演に議員時代から中国との関係が深く、いまでも緑化協力をつづけておられる武村正義さんをお迎えします。アジア、中国の環境問題、国際協力のあり方など、豊富な経験から語られるお話が楽しみです。

【緑の地球ネットワーク

第16回会員総会】

●日時：6月12日（土）13時30分～16時40分

○記念シンポジウム：13時30分～15時

『中国の環境問題と日中の協力』

◇講師：武村正義さん（元衆議院議員、日中友好沙漠緑化協会会長）

◇参加費：500円（GEN会員無料）

○会員総会：15時20分～16時40分

●場所：大阪市立総合生涯学習センター第2研修室（大阪市北区梅田1-2-2-500 大阪駅前第2ビル6F Tel. 06-6345-5000 JR「大阪」駅、「北新地」駅、各線「梅田」駅下車）

★総会終了後、懇親会をおこないます。

▽場所：居酒屋『和民』JR北新地駅前タカガワビル店

▽時間：17時～19時

▽会費：3,500円

▽申込み：6月8日までにGEN事務所まで。会員以外でも参加できます。

新しいスタートにむけて

環境林センター移転の顛末



さようなら、環境林センター

1995年4月の着工以来、15年間にわたって私たちの協力拠点であった環境林センター（大同市南郊区平旺郷平旺村）と、4月18日をもってお別れしました。

現在大同では大規模な開発が信じられないようなスピードです。環境林センターのあたりは従来は郊外でしたが、市街地化がすすみ、東南に1km弱のところから10万人が暮らす改良炭鉱住宅が立ち並び、2年後には30万人の大団地になります。都市住民

の憩いの場として、70ha近い生態公園が建設されることになり、環境林センターの敷地もすっぽりそのなかに入ってしまった。

もともと20年の期限付きの借地で、中心部の残りの期間は5年間。その後は公園になって市民に公開されるのが理想だな、と考えていたのですが、それが現実になりました。ただ、5年早かったのですけれども。

大同市の耿彦波市長は、「みなさんの協力事業の発展形だと考えてほしい」と語り、あそこで育てていた苗木はすべて新しい生態公園で育てるそうです。そして私たちの協力事業を記念するモニュメントをつくることを約束してくれました。

また大同市はほぼ同面積の代替地を提供してくれました。場所は大同県周士庄鎮で、私たちの2つ目の苗圃、白登苗圃から2kmほどの交通のたいへん便利なところで

す。現状はポプラの林で、いわゆる小老樹ですが、小老樹としてはかなり伸びがよく、土壌と水の条件がよさそうです。また地下水位も90mほどのようで、この地方としては浅い方です。4月に訪れた日本の専門家たちも気に入ってくれました。白登苗圃や実験果樹園「かけはしの森」との一体的な運営が可能になります。

今後は条件のいちばんいいところに苗畑をつくり、そのほかに見本園、有用樹種園、薬草園などをつくる案もだされています。地元の関係者ともよく相談して、長期計画を立てて臨みたいと思います。みなさんのご協力をお願いいたします。（高見邦雄）

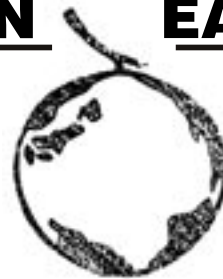


いまは小老樹の林。10年、20年後の姿は？

遅かった春の訪れ

植樹、交流、学び……

春のツアー報告



日本も中国も天候不順の春、5つの団が大同を訪れました。GENのワーキングツアー（29名、4/3～9）、イオンリテール労組・サントリー労組合同ツアー（26名、4/6～11）、東北電力総連（22名、4/13～20）、自治労大阪府本部（26名、4/17～21）、専門家派遣（8名、4/22～30）です。今号ではGENのツアー日誌から一部抜粋・編集したものと、イオン・サントリー合同団の参加者からお送りいただいた報告を紹介します。

【4月3日（土）】

▼2008年夏、2009年夏とツアーがとりやめになったので、今回は満を持して勇躍関空へ。なつかしい顔とも再会。北京へも順調な飛行。東京組、北京合流組とも顔合わせ。若い元気な方々も多いのに感激。北京空港を13時30分に出発。（中略）2度の休憩を含め5時間半のバスツアー。所要時間は通訳の孫さんが予言したとおり。

清明節の連休で北京市内は混雑していたが、八達嶺からは快調。途中の山に残雪を見る。気をつけていると道ばたにも少しばかり。今冬は例年になく雪が多かったとのこと。

19時30分から先発の高見さん、遠田先生、大同事務所の皆さん、霊丘の幹部方とともに晚餐、乾杯のくりかえし。今回のメンバーは年齢にかかわらず意欲満々の方ばかり。

いつも思い出す言葉がある。「木を育てるには百年の歳月が必要だが、人ははるかに早く成長する」。奨学金を提供

している山林経営者がその理由として語ったことである。GENの活動「木を育てるにはまず人を」もまさにこれを実践したものであろう。単に大同だけでなく、日本においても。明日からの活動が楽しみ。（小寺範生）

【4月4日（日）】

▼今日からいよいよ本格的に行動開始。

途中太行山脈を通ったが、TVでしか見たことのない中国の象徴とも言える景色を見ることができ、感動。広大な中国だからこそその自然風景であることをあらためて実感した。

そしてバスは目的地へと到着。バスから少し歩き、早速、植樹活動の開始。かなり寒いと聞いていたが、日差しが強いと感じるほどの天気と無風のため、非常に暖かい気候での作業であった。

午前中いっぱい皆で協力しておこなった植樹作業。初対面とは思えないほどのチームワークとバランスで、工程は順調に進んだ。女性も男性も、若者もベテラン勢も皆が全員頑張ってい



力をあわせて土を植樹場所まで運び上げる

たと思う。私も精一杯取り組み、非常に気持ちの良い汗をかいた。我々が植えた木が無事に成長してくれることを祈りたい…。

昼食は、カップラーメンを食べた。汗を流した後のご飯は何を食べても格別にうまい!!

午後は山登り。まさかそこまで…という所まで登った。というより頂上?

南天門からの景色は感動の一言。疲れもふき飛び、気持ち良かった。登る途中の“木”のお話とても面白かった。お年をめした方も、なんなく頂上まで

JICA 草の根技術協力事業 新プロジェクト決定

2009年度の補正予算で実施されることになったJICA草の根技術協力事業に応募したところ、採用が決まりました。昨年10月には内定していたのですが、中国政府の同意が遅れたため、JICA大阪国際センターと私たちとの契約が年度末ぎりぎりの3月29日までずれこんでしまいました。実質的な事業期間は今年度と来年度です。事業の名称は「環境保全と農村生活向上のための循環型農林業の追求」で、私たちのこれまでの協力事業の集大成になると思います。

（高見邦雄）

助成が決まりました

- （財）イオン環境財団より、小学校附属果樹園の建設に110万円の助成が決まりました。
- 日本経団連自然保護基金より、苗圃建設と運営に280万円の助成が決まりました。



絵はがき『黄土高原の花』 ご利用ください

電車のりと、みんな携帯でメールやネット、ゲーム。“つながる”という形が変わってきたように思います。だからこそ、手書きのお便りをもらおうと格別に嬉しいもの。きれいな花の絵はがきなんかだったら、もっと嬉しい?

ご無沙汰している大切な人に、黄土高原の花で近況報告のお便りを書いてみませんか。ご注文はGEN事務所まで。絵はがき【黄土高原の花】

8枚1組・300円（送料別途。5セット以上送料サービス）

行ったのはびっくり!! (石橋保昭)

【4月5日(日)】

▼出発すると、すぐに遠田先生と高見さんのお話が始まる。遠田先生は高い見地から大きな眼で見た中国・大同を、そして、高見さんはご自分の経験に基づくお話も多く、まるで補完しているようで、楽しく有意義。

中でも悪条件の中でスタートしたプロジェクトが、徐々に成果を上げ(木が成長し、落葉がふえ、菌根菌もふえて)、良い循環に変わっていく話には、いつもながらに感動。一方、村に井戸を掘って村人に喜ばれた結果が、地下水の水位を下げ、首都北京の水源に危機をもたらしている話にはやるせなさを感じる。(中略)

お昼過ぎに「緑色環境林センター」着。昼食。レストランではないのにどれもこれも美味しい。お野菜が豊富。お魚が多かったのはどうしてかなあ? キノコ、セロリ、キクラゲ、トマトとタマゴ、どれも美味。特に揚げ餅が格別。

食後は炭焼きをするはずだったが、風が強くて中止。説明だけ受ける。間伐材やコルクをとった後の樹皮が有効利用でき、菌根菌の育成に役立ち、植物の成長を早めるなら最高だ。

終了後は、雲崗石窟へ、観光。(中略)到着すると改修中という。さらに観光地化するために、かつてあったように大きな湖をつくり、浮島に寺院風建築。お店やレストランが入るという。俗悪な感じにならなければいいが…。そして急きょ植樹した大きな松。なんだかなあ、という感じ。でも、その木組み建築の技を間近に見、よくも、この技を持つ木匠が残っていたものだと感心。(小松みどり)

【4月6日(火)】

▼朝起きると天気が良く、スモッグも黄砂もなく中国に来て久しぶりに青空を見ることができました。寒く感じましたが昨日ほどではない気がしました。

バスで大同市内を進むと、車が多く道路も広く両側は商店も多く大都会だなあと思いました。でもこの建物も近々壊されるということでした。

白登苗圃、かけはしの森では広い土地でモンゴリマツ、トウヒ、アブラマツ、

シダレニレ、ヤナギ、ポプラなど多く育ててありました。私たちが苗木のそのポットに入れる土作りを手伝いさせていただきました。

昼食はおいしい料理で大満足でした。食後はカササギの森でモンゴリマツの植樹をしました。一面広い土地に多くの木が植えられています。寒さと土地がやせているせいで、コナラなどは成長が大変遅いということでした。カラマツ、シラカバ、カシワ、ナラ、ムレスズメ、ヤナギハグミ、イタヤカエデ、オニグルミ、ハギなどを植え育てていましたが、年月をかけて育てるのは大変なことだと思いました。

今回、中国は初めてで少し心配でしたが、食事もおいしいし、このネットワークの活動も見せていただき、ここまで頑張っている活動が続けてこれ、それに接することができたことに喜びを感じました。(前川満理子)

【4月7日(水)】

▼今朝からはイオン・サントリー労組グループと合流し、人数が倍になりバスが2台になった。雲崗国際酒店を8:30に出て、陽高県大泉山村に10:30頃着。耕作地を森林に戻す計画で村は廃村化している。緩傾斜地にアブラマツの植樹。穴掘り、植樹、水やりまで300本くらい植えた。昼食後に山頂の展望台をめぐる周回路を歩く。25年生くらいのアブラマツが数メートルの高さに育っているが、北側斜面は倍くらいの高さに育っており、周辺に実生の稚樹がみられた。大泉山展望館に地域の模型があったが、毛沢東の金ピカの像がすえられており、神格であることを知らされた。

そのあと守口堡村で、1996年に植えて立派に育っているアンズの果樹園を見る。野生のアンズの木やクルミの木があり、野生アンズにすぐれた果樹を接木しているとの説明と、実際の接木を見た。すぐ上に長城があり、元気な方はその急傾斜地を頂きまで登っていた。この長城は版築という工法で作られた土製である。ここを流れる幅10mくらいの川には、泥水が流れていた。上流の鉄鉱石の採掘所から鉱石を洗っ



子どもたちは本当に働きもの

た水を流しているとのこと。日本なら許されないことが平気でおこなわれている。環境問題への意識が低いことを見せつけられた。

4月6日のカササギの森ではイヌワシの電線への衝突死体があった。本日は大泉山村でハヤブサと見る猛禽を見た。植林地が育つとともに生態系の上位を占める生き物が入りだしているのは楽しい。(高田直俊)

【4月8日(木)】

▼孫家店小学校に到着すると、381名の子どもたちが、太鼓やカラフルな旗、かけ声と手拍子で迎えてくれました。そのような歓迎を受けるとは想像していなかったので、感動しました。

そのあとは付属果樹園でアンズの植樹をしました。子どもたちは本当に働き者でした。スコップで穴を掘っていると、すぐに代わってくれます。私も手伝おうとして、アンズの苗を踏んでしまっただけで怒られてしまいました。表土を穴の底に、深い土を穴の表面に埋め戻す流れが子どもたちにうまく伝わらなくて、土が混ざってしまったので、うまく育つか心配です。そして、穴を埋め戻して水を入れてから、接ぎ木の方向が逆になっているのに気がついて、スコップで掘り直してこっそりひっくり返した苗が1本ありました。枯れてしまうかもしれません。すみません。

植樹が一段落して近くの子に名前を聞いてみました。習い始めて1ヶ月の片言の中国語ではなかなか通じません。一生懸命話していたら、女の子が5人くらい集まってきました。(中略)みんなにこにこ人なつこくて、本当にかわいかったです。

そのあとは農家で食事をいただきま



した。私は、6人のグループで高さんのお宅にお邪魔しました。12歳の敏ちゃんという娘さんは、控えめですが、とても賢そうなきれいな女の子でした。私の語彙力では「ネコが好きです」ぐらいしか話せませんでしたが、敏ちゃんも「ウサギが好き」と答えてくれました。筆談したり、私の小さい頃の写真を見せたり、あやとりをしたりして、楽しい時間をすごしました。お料理もとてもおいしかったです。中国の家庭料理を味わえるのも、このツアーの醍醐味ですね。高さんのご家族とお別れするときは、本当に名残惜しかったです。(立崎祥子)

【4月9日(金)】

▼今日は列車の中で目覚めました。初の夜行列車でワクワクで眠れるか不安だったけれどみんなぐっすり。それからバスに乗ってホテルへ。朝食の後、

紫禁城に行きました。少しくもっていい景色を見れなかったのが残念。その後お土産を買いに。たくさん買い物できて大満足!! 毎日植樹をしてたからみんなで買物してるのがすごく不思議でした。すごく楽しかったけど、もう帰るんだって実感してきて少しさみしくなりました。1週間だったけれどずっと一緒にいたから、明日からいつもの生活に戻ってそれぞれの時間をすごすけれど、このツアーでみなさんとすごせた時間は、私にとって宝物です。みんな優しく楽しくて……。

私は子どもが大好きなので子どもとの交流をすごく楽しみにしていました。なので植林に対する意識がみなさんより低かったので、全てが新鮮で、一つひとつがすごく興味深く、自分がふだん生活しているあたりまえのことが、

どれだけぜいたくなものなのか、思い知らされた1週間でもありました。私がツアーの中でできたことはほんの小さなことかもしれないけれど、少しでも現地の方に貢献することができてよかったと思っています。このツアーに参加しなければわからなかったことがたくさんあり、また、水や自然に対する気持ちもかわり、日本に帰ってから今この気持ちを忘れることがないようにしていきたいと思います。すごく楽しい1週間でした! 少し大人になって日本に帰れます。ありがとうございました。(永井千弘)

ツアーで考えた3つのこと

神吉 久永 (サントリー労働組合)

まずは高見さんはじめ、現地を含むGENの皆様、通訳の唐さん、魏さん、1週間本当にお世話になりました! そして、ツアーに参加された皆様、1週間お疲れ様でした! 今回は、事務局として参加させていただきましたので、参加メンバー全員が貴重な体験をし、いろんなことを感じ、そして無事帰国できたことに安堵しています。

一方で、私自身、このツアーを通して3つのことを考えました。1つめは「継続は力なり」です。1992年に裸一貫で乗り込まれた高見さんの活動が、足掛け18年、本当に気の遠くなるような年月を要して現在の姿がある……カササギの森で一面に松が繁殖しているのを見た時に思わず込み上げてくるものがありました。

2つめは「一人ひとりにできることは限られている」ということです。ツアーを通して、植えた木はせいぜい10本、掘った穴も10個くらいでしょうか。一人ひとりにできることは限られているけれど、そうした活動が広がることで、大きな力になるのだということを痛感

しました。よく考えると、仕事も同じですよ。当たり前のことなのですが、あらためて実感した次第です。

3つめは「実行に移すことの大切さ」です。いくら貴重な体験をしても、感じただけ、考えるだけでは形として何も残らない。このツアーを通して参加者の皆さんが、何ができるのかを考え具体的に実行に移す。そして今後もひとつでも多くの経験を積んで、また実行に移す。こうしたサイクルを繰り返すことで、人間的にも成長していくのでしょうし、継続することで大きな力になっていくのだと感じています。



伝えたい、1人でも多くの人に

福本 麻衣 (イオンリテール労働組合)

イオンリテール労働組合はサントリー労働組合と合同で団を結成し、GENの協力のもと「中国黄土高原緑化ワーキングツアー」をおこなっています。

参加者は、老若男女26名が集まり「以前から環境問題に関心があり貢献した

い」「木をたくさん植えて黄砂を止めた」など、植樹への意気込みや各々の思いを持ってこのツアーに参加しています。

しかし、そんな思いは1日目の北京から大同のバスの中で一気に打ち砕か



れました。そこにあったのは日本では見たことのない地平線の果てまで茶色い風景で、硬く乾燥した大地を目の当たりにして、「私たちは、この土地に木を植えて何の意味があるのだろうか…」 「何て傲慢な考えだったのだろうか…」と

いう複雑な思いでツアーが始まりました。

短い滞在期間でしたが、新たに果樹園を作る村の子どもたちと一緒に作業したり、環境林センターの移設で移動してきた木を植え替えたり、初めて会う農家の方に笑顔で歓迎され、純粋な目をした子どもたちと交流し、毎日メンバーとお酒を酌み交わし、たくさんの経験をしました。そして毎日体験したこと、考えたことを真剣に語り合いました。

そこで私たちは、「幸せて何だろう」「豊かさって何だろう」という日本にいて普段考えることのないことを考えさ

せられ、最初は無力感に襲われましたが、「小さな一歩が大きな流れを作ること」「植樹を通じて地元の人たちとコミュニケーションをとること」などこのツアーでの多くの気づきを持ち帰ることができました。そして、私たちはこれからもこの活動を継続して、1人でも多くの人にこの経験を伝えたいと思いました。

このような素晴らしいツアーが無事行われるのも、この活動を長年続けてきた高見さんはじめ、現地のスタッフのみなさん、日本のスタッフの方々…たくさんの人のおかげだと思います。本当に貴重な体験をありがとうございました。

植物屋のこぼれ話 (続編) その 30

立花 吉茂 (GEN 代表・花園大学客員教授)

●食糧危機がやってくる

飽食の時代に食糧危機を唱えてもピンとこない人が多いようだ。食糧自給率が41%だと国がいうがそれでも危ないと思う人は少ないようである。お金があれば買えると思うのであろうが、ものがなくなるとお金は紙くず同様になることがわかっていないからであろう。特に食品は1日も待ったなしである。終戦直後の数年間はこのような状態であった。80歳以上の人でないといこの実感はわからないかもしれない。

最近の新聞の自給率の図がある。90%以上自給できているのは米だけだが、この図を見て米は安心と思う人がいるかもしれない。だが、小麦がほとんど輸入だからこれがストップしたら米は半分も足りない。さらに油脂類の輸入がとまったらどうなる？ 畜産物の餌がとまったらどうなる？ この図はカロリー計算なのだが、食品の実際のバランスを考えたら自給率は30%を下回るだろう。

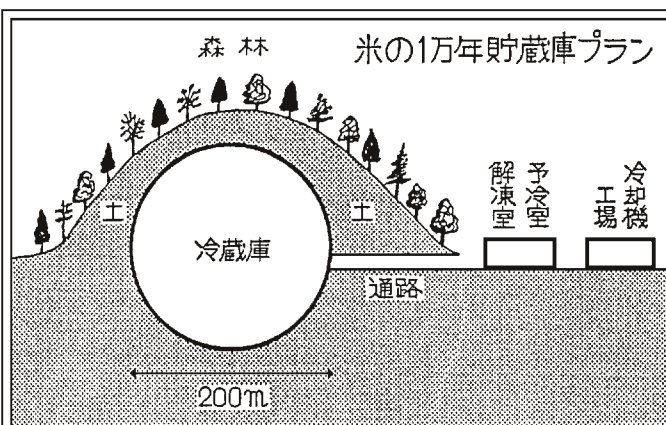
●米の1万年貯蔵プラン

中尾佐助博士の米の1万年貯蔵プラン(1980年)がある。30年前にこんなことを考えている人がいたのである。米の減反などせずにとんどん増産して

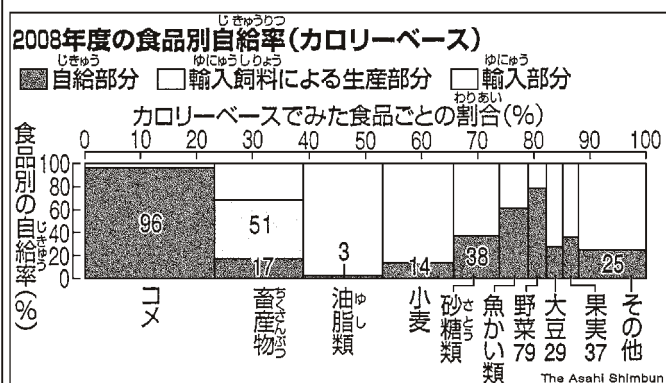
このように蓄えれば費用はたいしてかからないし、費用を分担した者には特別の切符を発行して、不足時に優先的に米を渡すというのである。零下30～40℃にしておくには電力を使うが2年目以後は冷却の電力消費はごくわずかで経常経費はほとんど問題にならない。このような冷蔵庫を10個つくると一億石の米を収納でき、全日本人が1年間たっぷり食べられるという。

そして中尾博士は、日本農業には多種類の作物、付加価値のある農産物の生産以外に生き残る道はない、フランスがブドウから数多くのワイン、何百という種

類のチーズを作って120%の自給率を得ているのを見習う必要がある、と述べておられる。この意見は近年の私たちの沖縄有用植物研究会の目標と合致している。私たちは30年遅れてやっと中尾博士の考え方に追いついたのだ。



1980 朝日ジャーナルより抜粋



2010年4月10日 朝日新聞より引用

黄土高原史話 〈50〉

旧大同市博物館

毎年春・夏のワーキングツアーでは、だいたい最終日に雲崗石窟に行くのが定番。世界遺産に登録される以前を含め、私も6回ほど見学したことが。今春で17回目参加の石田和久氏、雲崗の方はもうウンザリと、このほど大同市博物館の参観を希望。もともと華嚴寺内にあったのだが、市区の再開発にともなって、同寺外側の建物に移転したという次第。ところが今次ツアーは4月上旬に設定のため、清明節（中国の墓参り）と重なって、当日は休館。歴史好きの石田老、さぞガッカリされた



谷 口 義 介 （摂南大学教授）

ことでしょう。

旧博物館の方は、02年、ちょっと覗いてみたことあり。華嚴寺は、その名のとおり華嚴宗の名刹で、創建は11世紀、遼のとき。明代中期に上・下の2寺に分けられて、下華嚴寺の僧房（？）に旧博物館があったわけ。収蔵品の大部分は、大同を中心とした地域の出土。大同歴史文物陳列・北魏出土文物陳列（写真）、石刻芸術陳列・遼代芸術館に大別される。

古いところは、人骨・石器・骨角器を展示する「許家窑旧石器文化遺址」コーナー。詳しくは、本シリーズ<2>、「今から10万年前、『大同湖』の岸辺では」参照のこと。

ついで、漢と匈奴の戦いのパネル。こちらは同<22>、「天下分け目の白登山」で歴史講談風の名調子（？）。

参観したとき、別室にて若い館員が土器洗いの作業中。市内の北魏墓出土の由。

展示物中もっとも興味をひかれたのは、北魏の太和八年（484）銘をもつ司馬金龍墓より出土した鉛釉陶俑。墓に入れる副葬品（明器）で、釉をかけた人形です。高さは15から40センチの間。騎乗3体・立人13体よりなる儀仗兵グループ、鎧に身をかためた武人、威風

堂々たる騎馬武者は、フードつき長衣が特徴。寛衣をまとった文官、二人組み楽女が2セット。馬・牛・駱駝、骨を口にくわえた犬、その他。これらの陶俑には、黄・緑・濃褐色・褐色・黒の釉がかけてあり、なかには彩絵を加えたものもある。

そもそも冶金技術の発達につれ、金属酸化物が釉に利用されるようになり、戦国時代には瑠璃（ガラス）が出現。その瑠璃技術に刺激され、漢代には低温鉛釉の緑釉陶器も現れたが、それはまだ黄と緑の2色だけ。ところが北魏時代に至り、彩色は俄然多彩となる。おそらく西方からの影響でしょう。『北史』巻97「西域伝」の大月氏国の条に、

〔北魏〕太武〔帝〕の時、その国人、京師〔大同〕にて商販し、自ら能く石を鑄して五色の瑠璃を為ると云ふ。是に於て鉞を山中より採り、京師に於てこれを鑄す。既に成るに、光沢すなはち西方より來たるものより美なり。

と。大月氏は、そのころシルクロードにあった国。

「石を鑄して五色の瑠璃を為る」とは、彩色鉛ガラスを作るということで、司馬金龍墓から発見の鉛釉陶俑は、彩色鉛ガラスの釉を使っているわけだ。

見たときはホコリをかぶって煤けていたが、移転した先ではきれいにぬぐって展示のはず。石田さん、18回目のツアーの折には、ぜひご覧あれ。

2010 夏の黄土高原ワーキングツアーご案内

昨夏は新型インフルエンザで断念した夏の黄土高原ワーキングツアー。今年こそ、霊丘の南天門自然植物園で植物標本づくりに挑戦します。美しい花々も楽しんでいただければ。また、新しい環境林センターの起工式も予定しています。もちろん、村での植樹、交流も欠かせません。

2年ぶりの夏の大同、ぜひ楽しみにご参加ください。

●日程：8月21日（土）～27日（金）6泊7日

●費用：165,000円（国際航空運賃、中国国内の交通費／食費／宿泊費を含む。GEN年会費〈一般＝12,000円、学生＝3,000円〉、燃油特別付加運賃、空港使用料、旅券取得費用、個人でかける旅行保険料、個人行動時の費用は含まない）

※日本航空利用 ※関西空港発着 ★成田発着便は中国国際航空利用です。航空運賃差額（実費）が16,000円程度必要です。

●訪問先：中国山西省大同市（北京経由）

●定員：40人程度

●最小催行人数：12人

●申込み締切：7月16日（先着順）

★参加ご希望の方は、まずGEN事務所までご連絡ください。申込書類の準備ができましたら、（株）マイチケットからお送りします。6月中旬になる見込みです。

情報ひろば いっしょなかたち

パナソニック提供 龍谷講座 in 大阪
今、あなたに知ってほしい

世界の現実

2010年度社会貢献・国際協力入門講座

- 場所：龍谷大学大阪梅田キャンパス
講義室（大阪市北区梅田2-2-2 ヒル
トンプラザウエストオフィスタワー
14F）
- 定員：70人（事前申し込みによる先
着順）
- 受講料：無料
- 講座日程（毎回水曜日、19時～20時
30分）
- 第2回 5月26日「国境を越えるゴミ」
- 第3回 6月2日「平和のレシピ」
- 第4回 6月9日「複合差別と闘うネパー
ル女性たち」
- 第5回 6月23日「移住者と創る多文
化共生社会」
- 第6回 6月30日「フィリピンで貧困
に向き合う」
- 第7回 7月7日「考えよう！ ニッポ
ンの国際協力」
- 第8回 7月14日「世界最大のコンゴ
紛争、私たちとのつながり」

*当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。
主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。

*当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。
なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

第9回 7月21日「企業とNGOのパー
トナiership」

- 申込・問合せ：龍谷大学 REC 京
都「パナソニック係」（〒612-8577
京都市伏見区深草塚本町67 tel.
075-645-7892 URL <http://rec.seta.ryukoku.ac.jp/panasonic/>）ホームページの申
込みフォーム、または電話（祝日以
外の月～土、10時～16時）で。
- 主催：パナソニック（株）、学校法人
龍谷大学、NPO法人関西NGO協議
会

環境先進国ドイツ その答えは地域にあった！

～日本でもできる

環境まちづくりの事例紹介～

私たちが暮らす町でも実現可能で参
考になる事例を紹介していただきます。

- 日時：6月19日（土）15時～16時
30分
- 場所：京エコロジーセンター 3F（京
都市伏見区深草池ノ内町13 京阪電
車「藤森」駅徒歩5分）
- 定員：100人（定員になり次第締切）
- 参加費：無料（終了後のエコ交流会

は会費300円）

- 講師：杵本育生さん（環境市民代表理
事）／内田洋子さん（環境市民理事・
NPO高知市民会議理事長）
- 主催・申込み：NPO法人環境市
民（〒604-0932 京都市中京区
寺町通二条下る呉羽ビル3F tel.
075-211-3521 fax. 075-211-3531
e-mail : life@kankyoshimin.org URL <http://www.kankyoshimin.org>）氏名、住所、
電話番号、メールアドレス、交流会
参加の有無を明記して電話、FAX、E
メールでお申し込みください。

編集後記

環境林センターが閉鎖されました。
谷口先生が来られたときは、みんな
土器の発掘に夢中になって作業どころ
じゃなかったな。土壌浄化による汚水
処理、池をつくって魚を泳がせて、武
春珍さんは鯉だと言ったけど、どうみ
ても金魚だった。

数々の思い出も今は昔。新しいセン
ターの建設がはじまります。

新センターの名称を大募集します。
GEN事務所までお寄せください。（東川）